

さまざまな教育活動を通して



「この子を何とかしたいという思い」

この言葉は新採当時の学年主任から教えていただいた。主任は自らこの思いをもって子供たちを指導し、私も主任の指導を見習い、子供たちに接していた。失敗を重ねながらも毎日が楽しく、子供たちは若い私についてきてくれた。少しづつ指導に自信がついてきた頃、私の指導について先輩教師から指摘を受けたりもした。そのときに学年主任に相談すると、「子供たちはたくさん先生の教員との出会いの中で多くのことを学び成長していく。指導方法は違ってても、お互いに『この子を何とかしたい』という思いがあれば一緒に協力してやっていける。ビジョンを共有しながら自分ができることに最善を尽くしてやり続けることが大事だ。」と、再びこの言葉を話された。私はこの言葉を糧とすることで、違うタイプの先生方に何度も助けていただき、いろいろな指導法を学ぶことができた。また、ベクトルを合わせる大切さも学ぶことができた。

「啐啄同時は教育の原点」

初任校の校長から教えていただいたこの言葉は、「ひな鳥がまさにかえろうとして卵の殻を内側からつついているとき、親鳥が外から殻をかみ破り我が子の誕生を手助けする状況」をいう。「啐」の文字には「驚きもがき叫ぶ様子」という意味があり、まさに命がけで殻を破ろうとするひな鳥と、そのときを逃さずに外から啄む親鳥の必死の援助とが合わさって生命誕生が成し遂げられる様子を表している。

卵を温めながら卵の様子に気を配ってそのときに備えている親鳥のように、私たちも子供たちをいつもそばで見守り、教師の指導や援助が必要なそのときに全力を尽くして子供たちの力になれるようにしていきたい。家族の愛情を受けて育ってきた大事な子供たちを預かっていることも忘れずに接していきたい。

「教育力は関わる力」

この言葉はある学校の校内研修時に講師が話された言葉だ。教育力を「関わり方」とする力「関わる力」「関わった力」の三つに分けて考えると、関わる力(関わり方)や関わった力(結果)はすぐに成果が出るわけではないが、関わり方とする力(気持ち)は自分で意識することでいつでも実践できると考え、日々取り組んできた。

学校には、校長を始めいろいろな立場の教職員がいる。実際に子供たちに授業をしているのは教員であるが、子供たちの教育は全教育活動で担っていくことであり、全教職員がそれぞれの立場で関わっていくことが大事になってくる。子供たちに関わり方とする力も高めていけるように、学校の全員が心身ともに健康で前向きに勤務できる学校にしていくことが大事かと考える。

振り返ると、私は多くの先輩から教員として大事なものを実践をとおして学ばせていただいた。どの先輩もいつも子供たちのそばにいて、子供たちの話をよく聴いていた。そして子供たちのために全力を尽くしていた。

先輩の皆様にも、先輩や同僚たちに学びながら日々の教育実践に励み、子供たちが意欲をもって活動に取り組む中で成長していけるよう、更に尽力していただきたい。

中学卒業前の三年生に「最も思い出に残ることは何か？」と尋ねるとほぼ九割が「部活動」と答える。入学の際も部活動への希望や自主性は非常に強い傾向にある。何事も自主的な取り組みほど伸びるものはない。そこには自らの工夫があり、粘り強さや人知れず努力する姿もある。だから教師としてこの「絶好の学びの機会」を生かさない手はない。学校全体を考えても授業、生徒指導、特別活動等々、部活動の教育的効果を生かす場面は限りなくある。ただ子どもや保護者の思い入れが強い分トラブルも多く、成果を期待される顧問の取り組み方や専門性も問われる。そこで次の点を是非心がけてほしい。

- (1) 自主性を持って集まった集団の指導ができなければ、他の指導は更に難しい。そのときは要因を他に求めず、人としての自己の姿勢や指導法を見直すべきである。
- (2) 今自分に与えられた人的環境・物理的環境を部員のために最大限に活用する工夫を怠らない。他との比較で安易に妥協する監督は良い選手を育てられない。
- (3) 部員の人格を否定したり、人権を侵害したりする言動は、部員や保護者との信頼関係を著しく損なう。「技能の習得を通して人を育てる」という理念を常に忘れない。
- (4) 個性は総合力を上回る。より効率的に技能の伸長を図るためには、種目の特性に沿って各自の長所（個性）を見出し、褒めて自覚させ反復練習と試合で仕上げる。
- (5) 部員の発育・発達段階によって、目標や内容（種類・頻度・強度・時間）等を設定し、より自主的に課題克服ができるよう工夫する。
- (6) 勝つために頑張ること、多くのことを学ぶことができる。しかし、結果最優先と

なり要求レベルが高過ぎると、部員を追い込み自信喪失やトラブルを招くことになる。信頼関係をベースに目標を設定し、確認しつつ支援することが大切である。

- (7) 「躰け指導」は大切である。しかし、画一化された厳しい「躰け指導」や「弱点指摘型指導」に偏ると中・高生は本番や競った試合に弱くなる。肯定的指導とのバランスを自分なりに工夫する必要がある。

- (8) 理想の監督像を目標に努力することは大切であるが、自分の経験に自信を持ち過ぎ思い込みが強いと練習が自己満足に陥り、自分に合ったチームカラーの学年でしか好成绩を収めることができない。柔軟に部員の個性を引き出し伸ばすことが常勝の秘訣である。

- (9) 中学校では必ずしも自分の経験種目の顧問になるとは限らない。そのときは、正直にそして謙虚にその心境を語り、ともに勉強していくことを約束する。そして、率先して汗を流し常に部員とともにある監督をめざす。その誠実さは専門性に勝る。

- (10) 一部活動の顧問といえども学校組織の一員である。日頃の授業や生徒指導の取り組みを部員はよく見ている。それが、部活動での言葉一つ一つの重みや信頼に結びつく。「油断する事なかれ」

以上、選手以外の保護者にも「この部で良かった」と思わせたら合格点である。部員全員が日常の練習や試合を通して心と体のバランスを保ちつつ「部活動を続けて良かった」と感謝できる環境づくりを是非お願いしたい。

部活動への思い

一九九一年八月、全国中学陸上選手権宮崎大会での八百mリレー決勝。大歓声の中、トップでゴールを走り抜けたのは氏家中学校であった。胸の高鳴りが止まらず、湧き上がる歓声も優勝校を告げるアナウンスも全て聞こえているのに現実のものとは思えなかった。拳を握りしめ「よし！」と呟くと喜びがこみ上げてきた。全国制覇を目標に掲げ、日々練習を重ねてきた結果が達成された最高の時であった。陸上競技部の顧問になって十四年目の快挙である。

初任は塩原小学校、二年目に塩原中学校に異動になった。生徒数二百四十人規模の学校だったが、野球部をはじめ部活動が盛んに行われていた。陸上競技部はなかったが、陸上競技を指導したいという強い思いがあったので、新設を願ったところ快く認めてくれたのである。熱意を受け止めてくれた当時の校長をはじめ顧問の先生方には感謝の念でいっぱいである。情熱と選手経験のみの未熟な指導であったが、少数ながらやる気のある生徒たちに恵まれ、徐々に地区大会でも入賞するようになってきた。やりたいことができ、生徒とのふれ合いを通して喜びを共にできることは教師冥利に尽きる。そのためにも、現状に満足することなく指導力を高める必要性を感じ、競技会や強化練習会は格好の機会として積極的に参加した。その中で、多くの先輩、仲間に出会えたのは幸いだった。さらに、県内外の著名な指導者の話を聞き、指導法のノウハウを吸収していく中で、部活動の目指すものが見えてきたように思う。

スポーツには必ず勝ち負けが存在し、誰しもがいい結果を出したいと願っている。競技力を向上させようと厳しい練習にも臨むが、ただ負荷を課すだけの練習では目的は達成できない。基礎基本を大切にし、理論に裏付けられた技術指導があつて願いに届くものである。そして何よりも大切なのは、自分を律しよりよい学校生活を送ることであり、それを支える「心」を育てることにある。チームとしての練習形態を定着させ、能力に応じたトレーニングや技能練習のもとに自主性を引き出さなければ競技力の伸びは期待できない。現役中、五校で陸上競技部の顧問を務めた。いずれの学校でも恵まれた環境の中で思う存分指導に関わることができた。おかげで、県総合体育大会では四度の男子総合優勝、関東大会・全国大会での多くの入賞者を出すことができた。生徒たちが目標を達成し「やった！」と自信に輝く笑顔を見たくて部活動の指導に関わってきたと思っている。勿論、勝利の時ばかりではない。日の目を見ない生徒もたくさんいた。思うような結果を出せなかった時こそ、静かに自分を振り返り、次への意欲を燃やして欲しいと鼓舞してきたつもりだ。

部活動には多くの時間を費やしたが、そのために教科指導や学年・学級経営がおろそかになったことは無いと自負している。むしろ、そのことが刺激となり充実した日々であったと覚えている。確かに多忙であり、家族との時間や趣味に勤しむ時間は無かったかも知れない。教師には多忙さの原因となつている部活動だが、生徒にとつては成長の糧となる大きな存在である。部活動をやっていくことの意義を理解し、日々の生活において手抜きのない学校生活を過ごすことで大きく成長して欲しいものである。そんな生徒たちのためにも、教師として、部活動顧問として、生徒一人一人の成長を保障できる存在になつて欲しいと願っている。

楽しむ者に如かず

まず、以前「校長室だより」に書いた拙文をご紹介します。私の部活動に対する考えはこれに尽きます。

ある先生から「部活はどうやって指導すればいいのですか？」と尋ねられたので「生徒が楽しめるようにやってください」と答えました。部活動に限らず、何事もこれが基本だと思っています。

『論語』は名言の宝庫ですが、なかでもイチ押しをと言われたら、迷わず次の言葉を選びます。「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず。」

楽しんでやっている人にはだれもかなわない、といった意味です。最初に楽しいと思っただけならば、そのあと少々苦しいことがあっても乗り越えられます。この順番を間違えると大変です。勉強でも運動でも、指導者はまずこれを頭に入れておかなければなりません。

実は、指導者にはもう一つ大切なことがあります。決して難しいことではありません。それは、生徒と一緒に「自分も楽しむ」ということです。（平成二十四年五月）

生徒との一体感、という点ではこれ以上の活動はないと思っています。共に汗を流し、共に喜怒哀楽を味わい、共に感動できます。しかも毎日のことですから、生徒の成長の様子が手に取るように分かります。ときには、こちらが刺激を受けたり、触発されたりすることさえあります。

生徒の本音は部活動の中に表れます。楽しさの中に、ふだんの授業では見えない部分が見えてきます。また、試合のように緊張した場面になれば、その子の弱さや無意識がちらちら顔を出します。私たちは一つ一つの観察の積み重ねから、部員一人一人の全体像を少しずつデッサンすることができます。

つまり、部活動というのは人物を把握する絶好の機会であり、生徒を理解し指導する最良の場なのです。これを別の言葉で「教育」と呼ぶのではないのでしょうか。

学習指導要領においても、部活動は「学校教育の一環」と明確に位置づけられました。苦楽を分け合い、信頼関係を築き、生徒の社会性を養い、将来への自律を促す。部活動こそ、まさに教育の原点と言えるでしょう。教師たる者、すべからず部活動に専念すべし、と高らかに宣言したいくらいです。

もちろん部活動の現況は、必ずしもバラ色とばかりは言えません。少子化による部の存続問題、顧問の高齢化の問題、そして教師の多忙感の問題等、難題も散見できます。しかし、私は決して悲観してはいません。日々生徒たちと向き合い、部員を熟知している先生方の英知と熱意をもってすれば、解決できない問題などないと確信するからです。

結びに、アランの『幸福論』から引用します。思春期の生徒たちは楽しんでばかりはいられません。あれこれ思い悩むこともあるでしょう。教師だって同じです。生活に疲れたとき、あるいは定年を前にして気が滅入るとき、もってこいの言葉です。

「我々が情念から解放されるのは思考の働きによってではない。むしろ体の運動が我々を解放するのだ。」

神様と言われた

私は二十九歳の時、サトシ君（仮名）の祖母から「先生は神様です」と言われました。サトシ君は小学六年生から家に引きこもっていました。中学校三年生の修学旅行から登校するようになり、祖母は中学三年四月から学級担任になった私の力量と勘違いして卒業式の日にお札を述べられたのです。この言葉に私は大変とまどいました。

「自分は神様なんかじゃない。自分はやることなすことダメだった。」

担任となった四月から、私は家庭訪問し学校だよりや教材を届けるなど何とか接触をもとうとしましたが、努力すればするほどサトシ君は閉じこもってしまい、五月末には玄関に鍵をかけて私を完全に拒否していました。その頃の私は、県教育研究所の教育相談研修に毎週通ってカウンセリング理論を勉強し、たくさん書籍を読み、毎年担任する不登校生徒や保護者との関わりで「自分が何とかしてやる」と自信過剰でごう慢になっていました。ところが、サトシ君の前の私は無力でした。六月はじめ修学旅行の準備をしていた頃、「サトシ君は小学校の修学旅行も行っていないんだよなあ。」

グループ給食で、私のこんなため息混じりの独り言をユウ君とシン君（ともに仮名）が聞いて、

「僕たちが修学旅行に連れて行きます。」

と言いました。学級担任の私としてはうれしい言葉でしたが、「とはいっても無理だよなあ。」というのが私の正直な気持ちでした。家から一歩も出られず、修学旅行の事前学習にまったく参加せずに、どうして修学旅行に行きましょうか。

翌日、ユウ君とシン君は、

「昨日の学校帰り、サトシ君と会ってきました。」

と報告してくれました。私は、「先生と生徒というのは違うもんだなあ。修学旅行は無理でも、友だちと会えたことは良かったな。」と感じました。そして、「学校へ引つ張らない方がいい、あまり修学旅行を話題にしないほうがいいのではないか。」と友人二人にアドバイスしました。それからユウ君とシン君は部活動が終わると毎日家庭訪問してくれました。私のアドバイスは無視して「一緒に修学旅行に行こう！」と強烈に誘ったそうです。修学旅行が近づくと、ユウ君とシン君はサトシ君を誘い出して持ち物を一緒に買いに行ったり、旅行のしおりで説明したりとますます熱心になっていきました。私はただその報告を聞いているだけでした。

そして迎えた修学旅行出発の朝の情景を私は生涯忘れないでしょう。集合場所である朝礼台に向かって、遠く校門から三人が大きな荷物を持ってトツポトツポと歩いてくるではありませんか。（当時は事前に荷物を送ることはなく大荷物を持って行きました。）

「サトシ君が来た！」

サトシ君は修学旅行が終わってからも卒業式まで二日しか休みませんでした。生徒にとつて友人の力というものはとつともなく大きく、教師にできないことをやってのけることを私は思い知りました。サトシ君の神様は担任の私ではありません。友だちでした。

翌年、私は臨床心理学を学ぶため内地留学をさせていただきました。サトシ君、ユウ君、シン君と出会わなければ希望しなかったでしょう。受け持った生徒たちが私の神様になりました。

生徒の夢の実現のために

千葉県の県立高校を振り出しに商業科教員として積み重ねてきた年月も、三十六年目を迎えています。この間、勤務した学校や行政を通して一貫して取り組んできたことは、生徒の将来の夢の実現に向けた進路指導への取り組みです。

情報化・グローバル化社会の急速な進展により、国境の垣根が無くなり全てが地球規模で進む現代社会は、フリーターや契約社員の増加に見られるように、雇用の多様化・流動化が進行し、その環境が激変している時代です。現在、若者の社会的・経済的自立を目的としたキャリア教育の推進が叫ばれ、義務教育段階から、「生きる力」、「働く意義や目的」が指導されているのも、このような背景によるものと考えられます。私が教員駆け出しの昭和五十年代は、終身雇用、年功序列などのいわゆる日本型経営が世界から賞賛され、全ての国民が中流意識を感じられる時代でした。キャリア教育に注目が集まるのも、まさに、時代に対応した教育の使命の象徴のように感じられます。

ところで、昭和六十年に県南のA商業高校に赴任し、担任として生徒の進路指導に携わった中で、忘れられないことがあります。当時の商業高校は、完成教育の場と位置づけられ、卒業後の進路の多くは、就職であり、女子は事務職、男子は営業職等でした。A商業高校も、地域に根ざした商業高校として地域からの信頼も厚く、多くの卒業生が地元で活躍していました。このため、高校入学に際しても、就職という明確な進路目的を持って入学してくる生徒が大多数でした。ただ、そのような中でも、三年次の進路選択時には、具体的な就職先の企業名や具体的な職種の仕事や技能職・営業職等になると、生徒自身で

判断することが難しく、教員の後押しが必要となる場面が多く見られました。A商業高校で最初に担任したクラスのB子は、まさにこれに当てはまる生徒でした。何事にもまじめで成績は優秀、友人達からの信頼も厚い模範生でしたが、周りに対する気遣いから、明確な判断が下せないところが見られました。就職先の選択でも、周囲の声に振り回されて、なかなか決断が下せない状況でした。「就職するのは本人なのだから、迂闊に指導しない方がいいよ」という冷めた発言をする教員もいる中、進路指導主事から「担任として生徒の能力・適性を見極めて、適切なアドバイスをするのが進路指導」といわれたことに後押しされ、C社を推薦しました。優良企業であり入社試験も難しい企業でしたが、採用され、現在に至るまで三十年近くC社で活躍しています。二十代の駆け出し教員にとつて、進路指導の怖さを感じつつも、生徒のためと精一杯努力したことが誇らしく思い出されます。進路指導は、生徒の一生をある面では左右する大きな要素を持っています。進路指導にしても、進学先の選択についてのアドバイス次第で、生徒自身のその後の人生は大きく変わります。ある面では、これ以上責任の重いものはないとも言えますが、一人ひとりの生徒の立場に立ち、共に考え出した結論は、それがどのような形になるにせよ、生徒にとっては価値あるものであると信じています。進路指導には教育の本質に関わるものがあるといっても過言ではありません。

教師として将来の日本を背負う活力ある若者を育成しているという使命感とともに、教育には生徒の人生を変える力があるということを肝に銘じつつ、キャリア教育・適切な進路指導を通じて、生徒の夢の実現に向けて努力を重ねて欲しいと期待しています。

部活動指導を振り返って

「部活動を通して生徒から学んでほしいこと」というテーマをいただきました。

部活動、特に運動部活動では上手になり、強くなり、一つでも多く試合に勝ち、県大会では上位入賞を果たし、関東大会、インターハイ、全国選抜大会や国体で活躍したい。生徒も指導者も気持ちは同じです。何度か、あと一つというところまで行ったことがありましたが、生徒には悔しい思いばかりさせてきました。そんな部活動指導（私の場合は剣道です）において、生徒から気付かされたこと、教えられたことは数えきれません。試行錯誤の繰り返しでした。無言の内に「先生それが足りないよ」と気付かされ、教えられ、学んだことのいくつかを申し述べます。

「気迫」 生徒の集中力を高め、限られた時間の中、練習の質の高さを維持し、最大限の成果を出すには指導者の「気迫」が不可欠です。居るだけでその場の空気が「凜」と変わる。生徒も変わる。でも、私の場合はなかなか変えるまでの「気迫」は備わりませんでした。当然良い結果は出ません。私自身に何が足りないのか迷いました。「自信」がなかったんです。生徒はそれを敏感に感じ取ります。研修（私の場合は稽古）により培われた「自信」の現れが「気迫」です。

「忍耐」 技術の習得、技能の向上、そして何よりも人としての成長には個人差があるのは当然です。それは理解していても、生徒に対して結果を求めてしまいました。指導力不足を棚に上げ、我慢できずに「どうしてもできない」「どうしても分からない」「どうしても勝てない」、そんな気持ちは言葉に出さなくても態度に出てしまいます。生徒の意欲をそ

いでしまいました。三年間で花開く生徒もいれば、卒業して数年後に竹刀を交えて「えっ」と驚かせてくれる生徒がいます。そんな生徒ほど永い付き合いができるものです。

「思いやり」 選手になりたくない生徒はいません。選手になって大会に出たいと誰もが思います。でも、一度も選手になれずに卒業する生徒もいます。ある年のインターハイ予選で主将が、一人だけ選手になれなかった三年生の袴を使っていました。理由を尋ねると、「最後の大会なので、あいつの袴だけでも」とのことでした。

いただいたテーマからは離れてしまうかもしれませんが御容赦ください。

「為にしない」 教育に携わるからには生徒第一主義、学習指導でも生活指導でもどうすればよいか思い悩んだとき、「生徒の為には？」と考えれば答えは見えてきます。そうして得られた成果は生徒の努力、生徒の頑張りの賜物であり、指導者のものではありません。部活動指導でも同じです。指導者が「自分の為には？」と考えたら部活動は教育ではなくなくなってしまいます。勝つても負けても、素晴らしい成果を収めても、それは生徒の実績であり宝物です。生徒を駒や踏み台にしてはいけない。指導者は自分の「為にしない」、自分の実績にしてはいけない。私はそう思います。

「感謝」 私は小学六年の時に剣道を始めましたが、本当の意味での剣道との出会いは高校入学後の部活動です。良師との出会いです。本校を会場に私の師匠（七十四歳）、私たち教え子、私たちの教え子、そのまた教え子や子どもたちの四世代で、地域の方々の協力を得ながら稽古会を実施しています。すばらしい師や友を与えてくれた部活動（剣道）に「感謝」です。残り少ない教員生活ですが、少しでも恩返しをしたいと思えます。

栃木県立今市高等学校 岡 本 祐

静岡県出身の私は、昭和五十三年に保健体育科の新採教員として宇都宮中央女子高等学校に赴任した。知己のない状況で先輩教師から指導助言を戴き、授業と部活動にがむしやらに取り組んだ。三年後の栃の葉国体まで選手として何とか自分の競技レベルを維持しながら教職との両立ができたのは、生徒や周囲の皆さんのお陰だったと今でも思っている。そんな懐かしい思い出の国体から二巡目の栃木国体が二〇二二年に決定し、国体準備室が本年度設置された。二巡目国体をめざす指導者や選手に自分があの時お世話になったように、どんな支援や協力ができるのか、微力ではあるがお役に立ちたいと思っている。

さて私は四十代後半に県西地区の男女共学校に異動した。初めての共学校であった。過疎化等により定員割れが続く、七年後には閉校が決定していた。これまで勤務した女子校の生徒像とは異なる生徒像と向き合うことになった。定員割れにより、学校不適応等、多様な問題を抱える生徒が多く入学した。こうした生徒の進路実現や自立の道を歩ませることが大きな課題となった。生徒の実態を把握し、全職員で共通理解を図り、学校全体で一人ひとりの生徒を支援した。生徒指導部長として「その時 その場で その人が」を標語に、具体的には、ぶれない一貫した指導、粘り強く繰り返す指導、毅然とした指導をめざした。そのために基準の明確化と周知徹底を図った。「なんとかしなければならぬ」という教職員の意識改革により、学校全体が生徒と向き合い、一人ひとりを大切にする指導体制が年々充実した。学校はねじれるように変化した。生徒の出席率向上や「学ぶ意欲」の向上と共に社会や学校の規則を守っていくという規範意識が何よりも育った。

同校での六年間は教員生活の中で最も多くのことを体験し自分自身エネルギーが尽きたと思っただけだ。学校にはそれぞれ様々な課題がある。その課題解決に向かつて、まず生徒、保護者、そして何よりも教職員の意識改革が絶対であると考えている。そして教員一人ひとりが真剣に生徒達と向き合い、厳しさと愛情に満ちた指導で三年という時間をかけて育てられれば（生徒は自ら育つ）、生徒達は満足感を持ち、自立の道を歩めるようになるのではないかと思う。

教員として「生徒のために何ができるか」という一点にこだわり一途に歩いてきたつもりだ。しかし、教員一人の力は非力としか言いようがない。教職員が一丸となって同じ方向をめざし、「チーム〇〇高校」となれば、大きな力となり、学校教育力の向上に繋がる。そして、教育の質の充実と想像を超える改革が可能になるといえるのが、今までの経験から得たことである。

私も残り少ない教員生活となった。この小山南高校で最後まで精一杯努めたいと思っている。目下、生徒には「あいさつ 出席率日本一の学校をめざす」を目標として掲げ、保護者とも連携し「チーム小南」で本校の特色づくりに取り組んでいる。学校で全国のチャンピオンを一人出すことも大変なことだが、全校で一丸となって手にした「日本一」の方が価値が上がるのではないかと思っている。

最後に、これからの世代を担う若手教員の皆様には、生徒の「学び」に火をつけ「やる気」「本気」にさせる教員になって欲しい。また仕事は組織でするもの、ホウレンソウが最も大切だということを得、夢と希望と情熱を持ち、邁進してくれることを願う。

お母さん ぼく、学校でマルもらったよ。

私が教員になって三年目の頃、部活(ウエイトリフティング)指導力向上のため全国指導者講習会に参加して教えたかった、とても有意義な「導きの技」をご紹介したいと思います。高校野球からは池田高校の葛文也先生、バレーボールから松平康隆先生といった各界の実力者達の話の中で、学問の分野から東京大学の心理学者、板東義教先生の話にとっても感銘を受け、その後の指導方法に変化を与えてくれました。板東先生曰く、「私は今まで勉強の世界では、小学・中学・高校・大学(東大)でも常に一番の成績で過ごしてきました。そして今、心理学を教えている関係で、日本中に優秀な指導者をたくさん存じ上げています。しかしながら、もし、一番の指導者をひとり挙げよと言われたら、それは、私の母です」。そして話は次のように続いた。私の母(フナ)は、七人兄弟の長女に生まれたが運悪く小学四年で父親が他界した。病弱な母親とフナで生計を支えるため小学校をやめて奉公に出た。しかし、働いても、働いても運悪く店が倒産し、ついに女郎屋に、身売りに出されてしまうのです。家族のため、兄弟のため必死に働いて何年もたった頃、ついに身ごもってしまう。そこで、フナは仕事をやめて、その子を産む決心をする。そして生まれた子が、私(板東先生)。当然父親は、誰だかわからず、子供の頃はよく「父なし子」といじめられた。フナは泣いて帰ってくる「ヨシオ」(板東先生)をあたたかく抱いてあげ「笑顔」で対応してくれて、いつも優しく話を聞いてくれた。小学校に上がり「お母さん学校でマルもらったよ」と母に見せると、満面な笑顔で、「マルもらったよ」と聞いてくれた。お母さんの喜んでくれる笑顔が見たくてがんばる。「お母さん90点もらったよ」「あ

らくヨシオは出来るんだね。90点取った『の』と喜びを受け止めてくれた。コメントは一切ない。フナは小学校出てないから素直に喜べちゃう訳。板東先生曰く、「今のお母さん方は、学があるから、先ずマイナス10点見つけちゃう。ここどうして間違ったの?そそかしいんだから、バカだねえ〜!」。八割のお母さん方はコメントしちゃうそうです。しかし、ヨシオ少年は益々出来るようになって、高校も一番で入る頃には、フナも周囲の人から褒められるものだから、嬉しくなってきた。やがて、ヨシオがこんなに来るのは、父親は誰だったのかしら?あの人かしら?この鼻のところあの人だったのかしら?って。そして、ついにヨシオが言った。「お母さん、今日僕は『東大』に行ってくる」。するとフナは何を勘違いしたのか?「ヨシオや今日は天気も悪いし、波も荒れているから気を付けるんだよ」・・・?板東先生曰く、「愛は受けとめてあげるもの」。『の』の字・『の』の字で東大卒」という本まで出しちゃった。私は、これだ・・・。今まで、子供達を伸ばすのに上から目線で導いていた。生徒が、「40kgの新記録が挙がりました」と報告に来る。すると「全国では、140kgだよ」。なぜ素直に喜べなかったのか?コメントまでして。それからというもの方針を変えてみた。笑顔と「の」の字である。人は認めてもらうことが、何よりも嬉しい。それからの子供達の活躍はうなぎ登り。全国のチャンピオン、世界で戦う者、オリンピックのメダリスト、数多くの強者が育っていった。人は物を貰うと嬉しい。食べ物、プレゼント、貴重な品々。しかし、「こころ」を貰うともっと嬉しい。話を聞いて貰う、喜んで貰う、認めて貰う。物はあげると減る。しかし、「こころ」は減ったためしがない。人はいつの時代もこころで関わり合っているのですね。

元 栃木県立栃木翔南高等学校 小菅 富十郎

学校祭は「宝の山」

間もなく教員生活の幕を閉じますが、私が教員生活の中で情熱を注いできた活動の一つが学校祭でした。クラス、生徒会、委員会、部活動など生徒の活動の集大成が学校祭であり、そこには生徒たちの素が表れ、もつというところからはその学校の先生方の姿勢が読み取れます。学生時代の地域調査で学んだ観点ですが、地域調査のツボともいえるべき情報量の多い地点(事象)を「集積点」といいます。学校祭はまさにその集積点であると考えます。だから、学校祭が変われば学校が変わる、学校を変えたければ学校祭を変える、という理論的確信を持ち、勤務した四校全ての学校で私は学校祭を担当してきました。

しかしながら先生方の学校祭に対する認識はどうだったでしょうか。「ガス抜き」という見方が多勢であったように思います。行事指導は教師の本業ではなく、生徒にとってはガス抜きに過ぎないから、先生方の対応は「放置放任」に陥りそれを正当化します。ちなみに放置放任の対極が「管理」です。先生方のうち、学校祭は面倒でやりたくないけれども仕事だからと捉えている方で、いわゆる仕切る力のある方(君臨型教師と呼べます)は管理に走ります。私の考える学校祭指導の要点は、放置放任と管理とのその間を狙うべきで、学校とその時の生徒の状況によりその間のどこに着地するかということところに、私たちの力量が問われ、かつ指導の面白さがあるのだと思います。まさに教職の職人芸的側面です。では、あるべき学校祭の姿って何でしょうか。私は次のように考えています。

生徒はもちろん職員も全員参加であること。公開にあたっては来校者一人一人をたいせつにすること。企画内容は、One Wayではない参画型の企画であること。企画は単なる模倣、コピーに終わらずそこには創意工夫があること。学術的企画を必ず配置すること。生徒が望まなくても、質の高い文化的体験(演劇や合唱など)の提供の場とすること。学校文化の地域発信の場であること。本番の前には必ず準備活動があることを実体験させ、本番だけの目立つところだけをつまみ食いする行動を許さないこと。協働体験を通しての達成感、成就感にこだわること。結果として、クラス、学年、学校の一体感が醸成されること。

誰もが心から笑える社会の建設者になってほしいと願って、私たちは教育の仕事をしているのだと思います。公共心の欠落ほど社会を蝕むものはありません。これも学生時代に学んだ人類学からの観点ですが、学校祭はまさに「秩序の培養器」であると思います。

学校祭に取り組む過程で、生徒はさまざまな顔を見せるし、生徒への新しい発見は教員にとつてすごく嬉しい瞬間でもあります。でも、学校祭の意義がその観点だけに留まっては大局観を失った学校祭指導で終わってしまいます。更というと、本県の進学校においては、学校祭は典型的な「放置放任」「ガス抜き」型であったと思います。ですから県内進学校出身の先生方は、個人指導には長けても集団指導、行事指導の不得手な方が目立つように思います。これを読まれたみなさんはこの点をどのように感じますか。

後に続く若い先生方へのメッセージは、授業だけ、部活動だけ熱心という先生になってほしくないということです。最後に、学校祭創りのもう一つの重要な観点、それは学校祭には学習基盤の整備という機能があることです。たいへんで面倒かも知れませんが、ぜひ学校祭指導に理想社会の建設という大局観をもって臨み、挑戦し続けてほしいと切に願っています。期待しています。がんばって学校を変えていってください。

栃木県立栃木高等学校 角 海 紀 雄

昭和五十一年四月、母校である足利工業高校に新規採用教員として着任しました。高校生当時、柔道部に籍を置いて活動をしていましたが、大学進学と同時にレスリング部の門を叩き入部しました。以来、幸いにも一貫してレスリングに携わることができました。

昭和五十五年には本県において「栃の葉国体」が開催されました。生徒を指導しながら現役で選手生活を継続することを決断しました。ある日、東京で合宿を行っている宿舍へ下野新聞社のスポーツ記者から電話があり、「選手団の旗手に選ばれたのでコメントを頂戴したい」ということでした。私はビックリし返事ができない状態でした。大学でレスリングを始め、まだ目立った競技成績もない私が地元開催の選手団の旗手を務めることを想像しただけでそのプレッシャーに押しつぶされそうになったのです。開催県の三役「旗手」

「聖火ランナー」「選手宣誓者」は概ね優勝を遂げているというのが通例です。それ以降「優勝」しなければならぬという意識が四六時中頭の中にありました。しかし、結果は決勝で逆転負けという惨めなものでした。指導していた生徒も頑張りましたが優勝者を出すことができませんでした。ここで私は、たとえ優勝できなくても、入賞できる力がある間は現役を続けていこうという気持ちに考えを切り替えました。すると、肩の力も抜けてレスリング競技に対する考え方も今までのものとは全然違った見方をするようになるようになり、プレッシャーからも解放されて子どもたちへの接し方も、勝たせなければいけないという考えから、導き出すという考えに変化していきました。そんな中でも当初のころは、選手の課題を見出したもののかかなり強制的な反復練習をさせていたような気が

がします。でも競技成績は少しずつ向上の傾向を見せてくれました。私の指導方法は基本的に指導を行い、その後のプラスαの部分は競技者自身がゼンマイを巻いて動くことを期待して方向付けを行うというものです。その目的は、指導者から離れても自分で考えたことを工夫し実践できるようにすることです。全国の強豪校で管理指導を徹底して行つて多くの優勝者を輩出しているが、卒業後は競技成績も上がらず集団から脱落していく姿を見て、その指導のどこに問題があったのか考えた末の結論です。そんな中で一昨年開催されたロンドン五輪に参加した齋川選手は、ゼンマイを自分で巻き順調に育つてくれました。

さて、部活動の環境を整えることはすごく重要なことです。しかし、自分の理想とする環境が直ぐに全て整うかといえばそうではないことが殆どです。若い時はそのジレンマで上司や同僚とトラブルを起こすというようなこともあるかもしれません。私も急ぐが余り上司とぶつかり合ったことも多々あります。しかし結果は良い方向にはいきません。気長にコツコツやることでいつかは信頼が生まれてきます。ひとつのことを長く続けていると結果を導き出すのにいくつもの方法があることに気づきます。すぐに結果が導き出される時であれば、長い時間を費やさなければならぬ時もあります。

気長にやれと言っても、生徒が入学して卒業までの三年というスパンは結果を出すには決して長くはありません。しかし、短い期間、焦りの中で詰め込むには無理がありません。教師の魅力は幸いに卒業してからの教え子の成長する姿を見られるところにあります。そんなとき心が満たされ幸せな気持ちになれます。それも教師の魅力のひとつです。

「教育」という言葉に「教えて育てる」「教えながら育つ」という二通りの読みを考えるようになったのは、勤務二校目の宇都宮清陵高校で十年目を迎える頃でした。清陵高校には十三年間勤務しましたが、年度末の校務分掌希望には、クラス担任「二任」、校務分掌「生徒指導」、部活動「野球部」、これ以外は書いたことはありません。結果、担任を十年間、生徒指導部長を二年間、野球部顧問を十三年間経験することとなりました。この間の生徒や保護者、先輩教員や同僚との関わりの中で、「教育」とは「教えることを通じて個々の生徒の中にある人間力を育て、また教えて育てることを通じて自らも育つ」ということが観として身に付いた有り難い機会であったと、振り返ることができました。

さて、本文を寄せるに当たったの依頼は、生徒指導をテーマとする、とのことでした。生徒指導は、すべての生徒を対象としてすべての教員がすべての教育活動を通じて実践するべきもので、その目的は個々の生徒の現在の自己実現と将来の社会的な自立に必要な資質・能力、態度を育成することとも言えます。したがって、生徒の今を共感的に理解しながら、生徒の未来への想像力を働かせることが大切なことです。

生徒指導主事をしていた当初は特別指導の意味が曖昧で、問題行動に対しては「処分」とか「処罰」といった物騒な言葉が飛び交っていました。教員の理解がそんな状況ですから保護者も然りで、これでは学校と家庭が連携して生徒を育てるといったどころではなくなります。ある時、喫煙で数名を同時に指導した際にクレームを受けたことがありました。問題行動の指導は学校謹慎を方法とし、反省や学校生活への意欲、態度が確認できたら普

通に戻すようにしていましたが、「同じことをしたのに、謹慎の期間が違うのは納得できない」というクレームでした。「罰であれば同じ対応や公平さが求められますが、学校は罰するより指導と援助を通じて人を育てる場所ですから」と説明したところ協力的な様子が見られるようになったということがあります。何事についても言えることですが、目的と手段を明確にしておかないと、手段や方法であるはずのことがいつのまにか目的と勘違いされ形骸化や誤解に繋がってしまいます。

次に担任について書きます。ホームルーム活動は集団活動を通じて「人づくり」の醍醐味が実感できる、生徒指導の機能がもつとも発揮されやすい場と言えます。私がクラス経営の手段としたのは、一人一役割ということでした。目的は集団活動を通じて個々の生徒の自己有用感を高めさせること、自分で何事かを決定し実践する行動力を育てることでした。生徒理解は大切と言われますが、何も観点を持たずに行うのは難しいものです。役割活動という仕掛けを使って、生徒同士の関係構築や担任との相互作用などを通じて目的を持った生徒理解に努めていくと、育てたい生徒像とのギャップが見えてきます。その生徒の将来のために必要なものも見えてきます。そこから指導と援助が始まるのです。

我々の眼前の生徒たちには、将来、「変化・変革」がキーワードとされる社会での活躍が期待されています。そのためにどんな力を生徒に身に付けさせることを目指すのか、前例にとらわれず、横並び意識から抜けて、各校の生徒の実態に即した指導・援助が今日ほど強く求められたことは嘗てなかったと思います。若い世代が持つ発想力と行動力が各校の生徒指導の活性化に資するもの大となるべく期待を寄せています。

平成二十六年の春、大田原高校を最後に定年退職した私は、その三日後、児童虐待の通告を受け、子どもの安全確認のための家庭訪問をしていた。現在、私は教育の仕事から児童福祉の世界に身を置き、家庭相談員という仕事に取り組んでいる。三十六年間、一教師として「人権を尊重する教育」に微力ながら取り組んできたその延長線上に今も在るのかも知れない。

今日、子どもたちの間の陰湿な「いじめ」はより複雑化し、教師による体罰もなくならない。また、近年、親の子に対する虐待が増加し深刻な社会問題となっている。

こうした状況の中、教師の日頃の言動は、生徒の心に、時に漠然としてではあるが、その教師の人権感覚や価値観を伝えているものである。保護者も、教師の言動には大変敏感である。教育に携わる者としての教師には、常に人権に配慮した言動が強く求められていることを肝に銘ずる必要がある。

在職中「人権教育」に関しては次のような考え、信条を胸中においてきた。皆さんの実践や日常生活を振り返っていただくヒントになれば幸いである。

- ① 身の回りの社会で起きている人権に関する諸問題を感じ取ること
現代社会の現状・変化への敏感さが、教師の言葉の端々や仕草等に表れ、教師の人権感覚、価値観として、生徒たちに伝わっているのである。
- ② 偏見や差別の実態を知る努力をすること
生徒・保護者を取り巻く社会に目を向け、そこで起きている人権問題の現実を知る

ことで、教師としての指導力・資質を高める。

- ③ 人権を尊重する教育の推進は、教師としての責務であること
生徒たちの人権感覚・人権意識を培うことは、教師の大切な職務の一つである。

特に、在職した最後の二年間、始業式や終業式における式辞などの最後に私が必ず生徒たちに話した内容は「命（自他の）を大切にすること」と「自分の心は自分で耕すこと」であった。そこには、授かった命を大切にし、自他の人格を尊重し、他者を思いやる心など、豊かな人間性を生徒たちに培って欲しいという願いを込めた。そのためには、ボランティア活動などの社会体験や自然とのふれあい、様々な人々との交流、読書や芸術に親しむ機会をたくさん持とうと説いた。「心を耕す」ことについては、心を田んぼになぞらえ、「心が渴かないようにすること」が生きていくうえで大切なことであり、自分の心を耕すことが自己形成であり、「命を大切にすること」に繋がると繰り返し話したものである。

冒頭でふれたように、私は現在、児童虐待やネグレクト（育児放棄）等、家庭の諸問題に対応する家庭相談員として微力ながら子ども・親への支援に当たっている。日頃、家庭訪問や学校（保育園から高校まで）訪問、関係諸機関との関わりを通して今最も重要な課題と思うことを最後に述べたい。それは家庭的背景による学力格差である。学力格差は、教育だけの問題ではなく、家族や地域を通じて社会構造自体に由来するものである。この格差の解消は教育界の努力だけでは解決し得ないことだが、それでも私は学校と教師の皆さんに期待したい。学力が低位にある子どもたちに、家庭学習の指導を含む丁寧な底上げ指導をお願いしたい。併せて先生方自身も「渴かない心」を忘れずにいてください。

学び続けるために

自分が勤務している学校は、高校（全日制と定時制）に中学校が併設されて三年目を迎えた中高一貫教育校です。今年度初めて中高六学年が揃いました。中学一年生（十三歳）から高校三年生、そして定時制では最高齢七十二歳の方まで、同じ学び舎で学んでいます。学びに向かう異年齢集団ですが、その風景はそれぞれです。中学生は元気がよく、授業にも部活動にも積極的に参加し、何か質問されたら分からなくても挙手するくらいの勢いがあります。高校生（全日制）は文武両道を旨として、何事にも真面目に取り組んでいます。が、三年生になって受験モードに入ると教室は必死さと真剣さで充満します。職員室に來襲して先生方を質問攻めにしたり、遅くまで職員室前の廊下の机を占領したりしている様子を見受けません。定時制の生徒は複雑な事情や悩みを抱えた者が多いのですが、頑張り屋でもあり、昼間は働き夕方登校し、ゴールデンタイムに授業を受けて午後十時頃下校します。生徒たちの学ぶ姿を目にしていると、その一所懸命さに敬服するとともに、つくづく人は学び続ける生き物なのだと感じます。

現行の教育基本法第三条「生涯学習の理念」は、平成十八年の改正時に新たに盛り込まれたものです。その内容は、国民一人一人が「その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会」、いわゆる生涯学習社会の実現が図られなければならないというものです。第一、二条では教育を行う側の目的「人格の完成」やそれを達成するための具体的な目標が定められています。一方、教育を受ける側の目的は一律ではなく個人個人によって様々でいいのでし

うが、重要で大切なのは個人が自発的に「学ぶ」ということです。第三条は人間が一生涯学び続けることを推奨しているとも言えますし、むしろ、国民の学習したいという純粹で根源的な欲求に対して、社会全体で支え応援することは当然だということでしょう。さらに、私たちを取り巻く現代社会は、情報化と国際化の進展に象徴されるようにめまぐるしく変化・変貌しています。そういう急激な変化に対応するためにも「学び」は必要です。

教える側に立っている皆さんもまた学ばなければなりません。教育の世界でも流行と変化は押し寄せます。新しい専門的な知識や技術を身につけるために学ぶことを要求されるのです。学力は第一に大切ですが、子どもたちに学び続けられる力も身につけさせてほしいと思います。学校の現場ばかりでなく、学校以外でも学びの場はふんだんにありますし、学校教育を卒業した後でも学ぶ機会はたくさんあるはずで、自然体験や生活体験も大切です。学ぶ意欲の根幹にある知的好奇心や探究心は誰でも持つっていて、刺激を受ければ、泉のように無限に湧き出てくるものだと思います。それに「分かった」「できた」という気づきと達成感・成就感が加われば、それこそ学び続けるための力としては十分でしょう。皆さん自身も生徒と一緒に学び続け、新たな「学び」や「気づき」を得た時の感動を是非伝えてください。人の一生は「学び」の連続で成り立っています。

栃木県の生涯学習推進計画「新・とちぎ学びかがやきプラン」によると、県民の生涯学習実践率（日頃何らかの学習活動を行っている人の割合）は平成十二年度以降70%以上をキープしており、これは内閣府が調査した全国の場合と比べると30%程度大きく上回っています。驚くことに、そして誇らしいことに我が栃木県民は大変な学び好きなのです。

栃木県立矢板東高等学校・同附属中学校 村山二郎